

Border tourism in Sakhalin 2019

2019.8.10~14 今、サハリンの旅が面白い



2019年8月10日（土）

午前9時50分オーロラ航空 HZ4537 便ボンバルディアの50人乗りターボプロップ機は曇り空の千歳空港を離陸した。

サハリンの北緯50度旧国境を訪ねる旅の始まりだ。サハリンはかつて樺太と呼ばれ、北緯50度以南は日本の領土で約40万人の日本人が暮らしていた。北海道宗谷岬からサハリンのクリリオン岬までは43km。今、サハリンは日本に一番近い外国の島となっている。

千歳空港を出発してから1時間25分、現地時間で午後1時15分（時差2時間）ユジノサハリンスク空港に到着した。ユジノサハリンスク空港は樺太時代に旧日本軍の大沢飛行場として開設された。

空港ではビートモ旅行社のターニャさんが出迎えてくれた。私たち（一行9人）は用意された大型ワゴン車に乗り込み、さっそくユジノサハリンスク市内へと向かった。山並みや草木などは北海道に良く似ている。やはりこの風景は、サハリン島が日本列島の延長線上にあることを実感させてくれる。

空港から市の中心部までは車で約10分ほどだ。ユジノサハリンスク市はサハリン州（サハリン島と千島列島）の州都で人口約19万人、1905年日本が南サハリンを領有した際、人家の無い平野であった。当時の樺太庁は樺太開拓の中心となる街を、札幌をモデルとして創り、豊原と名付けた。

ユジノサハリンスク市のメインストリート「レーニン通り（樺太時代は大通り）」に到着。マトリョーシカをデザインした看板で有名なロシア料理のレストラン「マルーシャ」で昼食をとった。



レストラン「マルーシャ」

マルーシャは清潔感のある雰囲気がいいレストランだ。テーブルには既にロシア風サラダ「サラート・オリビエ」が出されている。オリビエはロシア料理の定番で前菜のようなものだ。レストランによって色々なバリエーションがある。続いてロシア風魚のスープ「ウハー」(レストランによってはボルシチ)が出る。黒パンといっしょに食べると美味しい。メインディッシュは焼き野菜と牛肉のロール卷、そしてデザートはブリヌイ(クレープに近い)又は菓子パン、最後にチャイ(紅茶)かコーヒー。この他にもロシア風水餃子「ペルメニ」朝食の定番「カーシャ(ロシア風お粥)」がある。今日から4泊5日、このようなロシア料理を楽しむことになる。



サラート・オリビエ



魚のスープ「ウハー」



ボルシチ



ブリヌイ



カーシャ



ペルメニ



ユジノサハリンスク駅前のレーニン像

レストラン「マルーシャ」で昼食をとった後、ユジノサハリンスク市内観光にでかけた。

まずは、ユジノサハリンスク駅前のレーニン広場を訪ねる。ロシア極東地域最大といわれるレーニン像が出迎えてくれた。

次にサハリン州郷土博物館を見学。この博物館は1937年に樺太庁博物館として建設されたものだ。1945年には旧日本軍の樺太師団司令部が置かれたこともあった。また、横綱大鵬の父であるボリシコさんが守衛として勤務していたこともある。

館内の2階展示室には北緯50度旧国境標石が展示されている。また、前庭には戦前の日本の小中学校などには必ずあった奉安殿、旧日本軍の95式軽戦車も展示されている。



国境標石、左が南面「菊の御紋」右が北面「ロシア皇帝の紋章双頭の鷲」



帝冠様式を今に残しているサハリン州郷土博物館

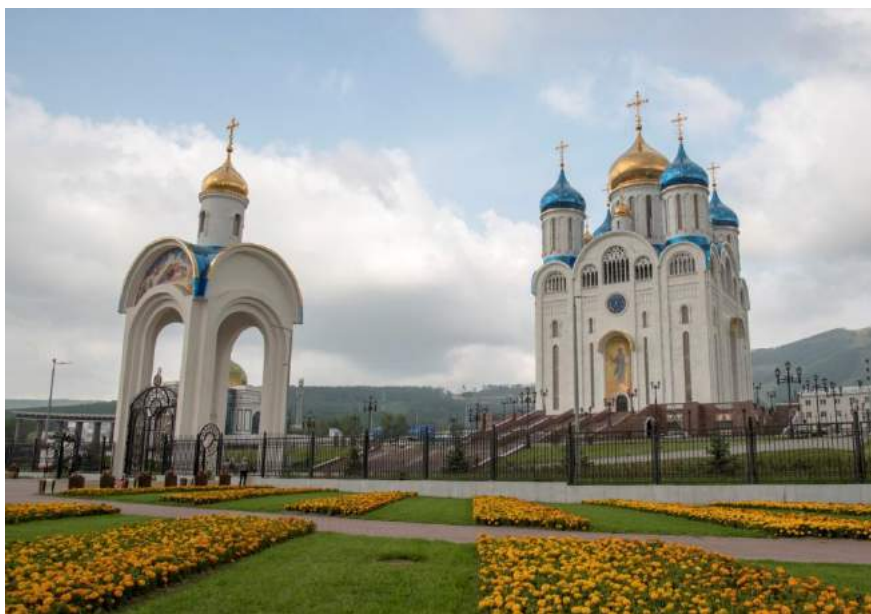


戦前の小中学校等に必ずあった「奉安殿」

サハリン州郷土博物館を見学した私たちは、ロシアのお土産店「ゲルメス」に行く。ショッピングの後は、勝利広場を訪ねた。勝利広場は太平洋戦争に勝利した記念広場で、樺太時代の旭ヶ丘スキー場の麓にある。2016年に完成した巨大なロシア正教会の建物を中心にして左側にサハリン千島列島戦争歴史博物館、右側にロシア我が歴史博物館が建っている。



ロシア正教会（礼拝堂）



ロシア正教会（ユジノサハリンスク）



サハリン千島列島戦争歴史博物館展示室



サハリン千島列島戦争歴史博物館

勝利広場の後は、栄光の広場を訪ねた。栄光の広場は、樺太神社跡にある。樺太時代の神社境内広場には旧ソ連軍の戦車などの兵器が陳列されていて、私たち日本人には違和感がある。この後は今夜の宿「パシフィックプラザ・サハリンホテル」にチェックイン。夕食はホテルのレストラン。夕食後はホテル近くのショッピングセンター「ピエールビィ」に行き、買い物をして旅の1日を終えた。

2019年8月11日（日）

午前9時ホテルをチェックアウトして、大型ワゴン車に乗り込んだ私たちは、ポロナISK（旧敷香）を目指して北上した。同行の鈴木さんが幼少時に暮らした並川（トロイツコエ）を見たいとの希望で、ユジノサハリンスク市街の西南にあるトロイツコエを訪ねた。車内からトロイツコエを見た後、ノボアレキサンドロフスク（旧草野）、ソーコル（旧大谷）を通過してドリンスク（旧落合）に到着。旧落合駅のホームと道路沿いから王子製紙落合工場跡を見学した。



樺太時代のホームが残るドリンスク駅



王子製紙落合工場跡



ドリンスクの後は、スタロドブスコエ（旧栄浜）を訪ねた。栄浜は宮沢賢治ゆかりの地である。1923年7月31日花巻を出発した賢治は、8月3日に当時日本最北端の鉄道駅であった栄浜駅に着いた。栄浜に着いた賢治はオホーツク海岸や近くにある白鳥湖を訪ねている。この時の印象や想いを「オホーツク挽歌詩群」として残している。また、代表作「銀河鉄道の夜」をイメージしたのも栄浜や白鳥湖といわれている。

今、栄浜駅は無い。かつて駅があった場所にはハマナスが群生している。花の時期は終わり、残り花が1輪咲いていた。オレンジ色の実がなっている。そんな土中に朽ちた鉄道の枕木が僅かに残されていた。

旧栄浜駅跡を見た私たちは、白鳥湖を通過、オホーツク海沿いを北上した。次に訪ねるのは、ヴズモーリエにある東白浦神社跡である。東白浦はかつてはニシン漁やサケ漁などの水産業で栄えた集落で、同行の鈴木さんの生まれ故郷でもある。

東白浦神社跡には皇紀 2600 年と刻まれた立派な鳥居が、海を見下ろす山の中腹に残されている。私たちはかつての参道を登り、鳥居をくぐって社殿のあった場所からオホーツクの海に想いを馳せた。

東白浦神社跡の帰り道、かつて小学校があったであろう場所に残された奉安殿を見学していると、地元のロシア人が大きな箱を抱えてやって来た。箱の中には樺太時代のものであろうと思われる陶器の欠片やガラス瓶などが入っていた。話を聞くと自分が掘り起こした宝物で、欲しい人に売りたいとのことであった。この後、ヴズモーリエ駅の名物、カニの露店を見てからマカロフ（旧知取）目指してさらに北上した。



東白浦神社跡に残されている鳥居



掘り起こした陶器類を見せるロシア人



ヴズモーリエ駅の名物カニの露天販売

マカロフ（旧知取）は同行の渡辺さんの故郷である。私たちは、車中で渡辺さんから樺太時代の貴重な体験談を聞くことができた。渡辺さんは本土に引き上げる際、豊原駅前でソ連軍の空襲に遭い、九死に一生を得る体験を語っていただいた。

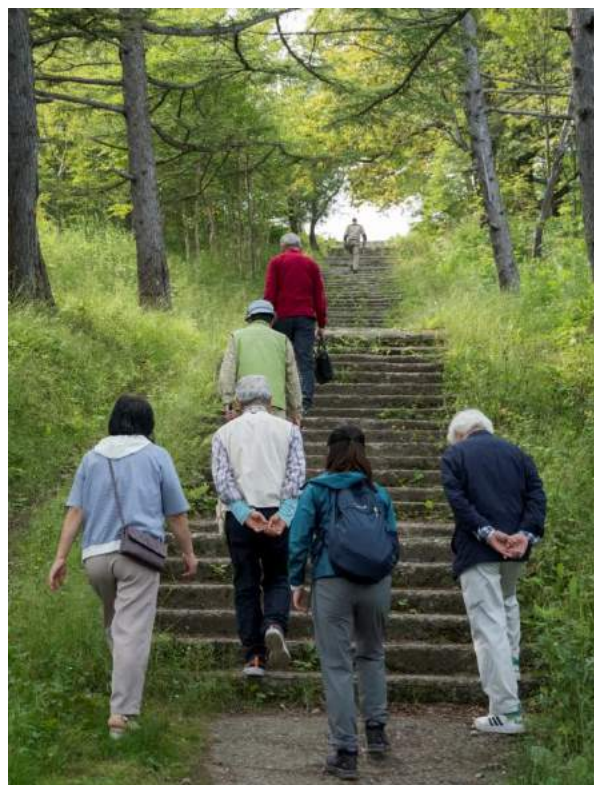
私たちを乗せた車は昼食場所であるマカロフのレストラン「リュークス」に着いた。リュークスの前には渡辺さん知人である石川さん（在留邦人で元マカロフ市の職員）が出迎えてくれた。レストランの通り 1 本を隔てた場所に渡辺さんの父が経営する写真館があったそうだ。渡辺さんはこの縦の道が神社通りで、突き当り丘の上に知取神社があったと教えてくれた。やはり故郷の土、故郷の空気は違うなと感慨深く話してくれた。

昼食後、私たちは知取神社の跡を訪ねた。神社跡の横にはグラウンドがあって、ロシア人がサッカーを楽しんでいた。私たちはグラウンドを横切って、日本人墓地に行き、安らかな眠りを願って祈りを捧げた。

渡辺さんの母校は知取第一国民学校だ。1943 年 11 月、知取第一国民学校で火災が発生して 23 人の児童が犠牲となった。その慰霊碑がかつて学校が建っていた場所にある。渡辺さんは花を手向けて犠牲者の霊を慰めた。私たちも慰霊をさせていただいた。渡辺さんが慰霊碑の前で「夕焼け小焼け」を歌い、皆で合唱となった。



知取第一国民学校火災犠牲者慰霊碑前にて



マカロフに残る知取神社の石段

マカロフのレストラン「リュークス」で昼食をとった私たちは、ポロナISKに向けてオホーツク海沿いをさらに北上した。午後 5 時の少し手前の時間にポロナISKに到着。

ポロナISK（旧敷香）は横綱大鵬の生まれ故郷である。大鵬は 1940 年 5 月父のポリシコさん（ウクライナ人）と母納谷キヨさんの三男として敷香で生まれた。今、実家があった場所には横綱大鵬像が立っている。私たちは大鵬像の前で記念撮影をしてから、旧敷香駅跡を訪ねた。1937 年 12 月当時日本最北の駅であった敷香駅に女優岡田嘉子さんと演出家杉本良吉さんが降り立ち、翌年正月に北緯 50 度線を超えてソ連に亡命するという事件が発生して世間を騒がせた。

午後 5 時 30 分、ポロナISKのホテルセイビエルにチェックイン、ホテルの 1 階にあるレストランで夕食を取り、今日の旅を終えた。



大鵬の父の実家があった場所に立つ像（ポロナISK市：旧敷香町）

2019 年 8 月 12 日（月）

ポロナISKは小雨が降って肌寒い朝を迎えた。

午前 9 時、ホテルを出発、ポロナイ川の渡し船乗り場に行ったが運航は午前 10 時からとので、先に王子製紙敷香工場跡を見学することにした。

王子製紙敷香工場は、1936 年に日本人絹パルプ工業株式会社が、当時世界最先端の設備を誇る巨大工場として開設した。その後、王子製紙に吸収合併され、敗戦と同時にソ連に接収された。ソ連崩壊直前まで稼働していたようだ。この巨大廃墟は一切の管理が無く、勝手に中を見ることができる。廃墟マニアには垂涎の光景である。



巨大な廃墟と化した王子製紙敷香工場跡



巨大な廃墟と化した王子製紙敷香工場跡の内部



王子製紙敷香工場跡そびえる巨大な煙突

王子製紙敷香工場跡を見た私たちは、ポロナイ川の渡し船乗り場へと車を走らせた。ポロナイ川の河川敷に着くと、渡し船が運航していた。渡し船に乗って「サチ（佐知）」を訪ねる。サチには第二次世界大戦で犠牲となった少数民族の慰霊碑がある。サチはニブフやウイльтаなどの北方少数民族が多数暮らしている場所だ。

日本が統治していた 1905 年から 1945 年、当時の樺太庁は北方少数民族に対応するため敷香に土人事務所を置いた。土人事務所はサチの更に奥にあるオタスの柱に北方少数民族を集めた土人部落を作って日本語教育などをした。そこで日本語教育を受けたニブフやウイльтаなどの人々が旧日本軍に現地徴用され、北緯 50 度国境地帯の諜報軍人として使われ、数多くの人たちが戦争の犠牲になった歴史がある。



先住民族戦争犠牲者慰霊碑



ポロナイ川の渡し船

私たちはポロナイスクを後にして、北緯 50 度旧国境を目指して北上した。

車で 30 分ほど北に走ったところにレオニードボ（旧上敷香）の町がある。ここは 1939 年樺太に日本軍の軍隊（当初は旅団のち師団）が配置された時の司令部が置かれた場所である。今も旧日本軍幹部の住宅が残っていて、ロシア人が一般住宅として住んでいる。終戦時には朝鮮人虐殺事件が発生した場所でもある。



朝鮮人虐殺事件の慰霊碑



レオニードボ（上敷香）の旧日本軍の幹部住宅

レオニードボを後にして、さらに北上。スミルヌイフ（旧気屯）のレストラン「イズブーシュカ」で昼食を取った。



レストラン「イズブーシュカ」の外観

昼食後、私たちはパベジュノ（旧古屯）にある樺太・千島戦没者慰霊碑を訪ねた。慰霊碑がある古屯の八方山は 1945 年 8 月 11 日から 18 日にかけて日本軍とソ連軍との間に激しい戦闘があった場所で、今も犠牲となった兵士が人知れず眠っている。私たちは白菊を手向けて祈りを捧げると共に渡辺さんの提案で「ふるさと」を合唱して慰霊をした。

古屯は 1945 年 7 月に開通した日本最北の鉄道駅があった場所でもある。今、パベジュノ駅（旧古屯駅）は、日本時代の狭軌から広軌にレール幅変更の工事が行われていた。



パベジュノ駅



樺太・千島戦没者慰霊碑

私たちは、パベジュノを後にして北緯 50 度旧国境を目指して、車を走らせた。今、走っている道路は樺太時代に軍用道路として敷設された。ツンドラの森林をほぼ直線で貫く道路沿いにはトド松が青々と繁っている。間もなく北緯 50 度線に到着、道路沿いにはソ連の戦勝記念碑が建っている。その奥 100m 程の所に旧国境標石天 3 号の台座が残されている。



白樺林の中にあった旧国境標石天 3 号の台座

サハリン北緯 50 度線には 1945 年 8 月まで日本とソ連の国境があった。そして今はロシアの支配地になっている。この地に立つと、国境という目に見えない線は、不動のものでなく、時代によって移ろうものだという事がよく分かる。

旧国境の近くには今も旧日本軍のトーチカが残されている。分厚いトーチカのコンクリート壁面には、幾つもの弾痕がある。後年に復元された塹壕もあり、中に入ると今にも射撃音が聞こえて来るような錯覚になるのが不思議である。

旧国境地帯にたどり着いた頃には薄っすら青空も見えて来た。無事に目的地に到達した私たちは、ポロナイスクのホテルへの帰路に着いた。



旧日本軍のトーチカ

2019 年 8 月 13 日 (火)

この日、サハリンは雲一つない快晴となった。

私たちは、ポロナイスクからユジノサハリンスクへと昨日来た道に戻る。ただ、今日は途中のチーハヤ海岸でカニパーティを予定している。参加者全員の日頃からの精進の賜物のような天候に恵まれたカニパーティができるぞ！心は既にチーハヤ海岸に飛んでいた。

私たちを乗せた大型ワゴン車は、太陽に輝くオホーツク海を左に見て南下している。ボストーチナエ海岸（旧元泊）には、幕末の探検家松浦武四郎が絶賛した樺太の景勝「三つ富士」が見える場所がある。いつもは霞んで見えにくい三つ富士が今日はくっきり見えている。私たちはボストーチナエ海岸で暫し休息をとることにした。



三つ富士がくっきり見えるポストーチナエ海岸
(写真上) と採ったコンブを見せてくれたロシア
人 (写真左)

海岸では、数人のロシア人がコンブを採っていた。元泊のコンブは樺太時代に品質の良いことで知れていた。海岸にはハマムギやナデシコ、シオンなどの原生花が咲き競い、青い海岸線を彩っていた。



ポストーチナエ海岸で遊んだ後、チーハヤ海岸へと先を急いだ。カニパーティはどんな趣向なのだろうか。想像するだけでワクワクしてくる。やがて私たちを乗せた大型ワゴン車は海岸から内陸へと入った。そして途中から泥んこ道に入った。碎石場を通り過ぎてしばらくすると眼前に海が広がるなだらかな砂浜の入り江が飛び込んできた。チーハヤ海岸だ。海岸には大型のテントが張っており、ビートモ社の副社長がカニパーティの準備をしていた。

テント内のテーブルには茹で上がったタラバガニ、花咲ガニ、ホタテやエビの刺身などが所狭しと並んでいた。これを見ただけでも感激である。私たちは思い出の写真を撮影した後、さっそくカニたちを頂いた。身がびっしりと詰まったいわゆる堅ガニだ。全員声も出さずに舌鼓を打っている。テントの外からは潮騒とカモメの鳴声が聞こえてきて、海の幸をより一層引き立ててくれる。

テーブルのカニを全部平らげて満足している私たちに、こんどは生のタラバガニをその場で茹でてくれるという。何とも豪華な話にビックリ！ まずは特大の生タラバガニと記念撮影。しばらく待つと赤く茹で上がった大タラバガニが運ばれて来た。これが何と旨いことか、文字では表現できない美味しさである。胃袋が破裂しそうなぐらいカニ三昧の後には、サモワールで沸かしたロシアンチャイでゆったりと時間を楽しんだ。約 2 時間半の豪

勢は昼食であった。大満足の私たちは惜しむようにチーハヤ海岸を後にした。



カニパーティのテント



新鮮なホタテ貝、カキ貝



大きな生のタラバガニ



サモワールを使ったロシアンティパーティー



チーハヤ海岸を散策



チョコレート工場

チーハヤ海岸を出た私たちはユジノサハリンスクへと車を走らせた。ユジノサハリンスク市内では、樺太時代に製糖工場であった建物を訪ねた。今は「サハリンスキー・カンジェーチェル」というチョコレート工場になっている。お土産にチョコレートを買い、工場を後にした。サハリン最大のショッピングモールで買い物をしてからホテルにチェックイン。レストラン黒猫で夕食を取り、今日の日程を終えた。

2019年8月14日（水）

4泊5日の旅も最終日となった。午前9時、ホテルを出発した私たちは、サハリンスカヤ通り（真岡通り）にある自由市場を訪ねた。10年ほど前まで道路沿いに露天が立ち並ぶ市場であったが、今はほとんどビルの中にある。

自由市場を後にした私たちはコルサコフ市（旧大泊）へと車を走らせた。コルサコフはサハリンで最も古くから拓けた町の一つで、日本人はクシュンコタンと呼ばれた江戸時代から住んでいた。

コルサコフに着いた私たちは、樺太時代に神楽岡公園と呼ばれた展望台に来た。ここからはコルサコフの港が一望できる。この後、コルサコフからメレイの海岸に行き、1905年7月旧日本軍が上陸した記念碑が横に倒れて残されている場所を訪ねた。メレイ海岸を少し行くと天然ガス液化プラントがあるプリゴノドノエに至る。サハリンのガス田がある北部からプリゴノドノエまではパイプラインが敷設されている。ここで生産されたガスの大半は日本へと運ばれている。

「今、サハリンが面白い」北緯50度旧国境の旅はこれで全ての日程を終えた。

私たちはユジノサハリンスク空港からオーロラ航空の HZ4536 便で帰路に着いた。飛行機の窓からは、クリリオン岬、そして間もなく稚内市街、利尻島がくっきりと見えた。時差を差し引くと千歳空港にはユジノサハリンスク空港出発時より早い時間となる。やはり最も近い外国なのだ。



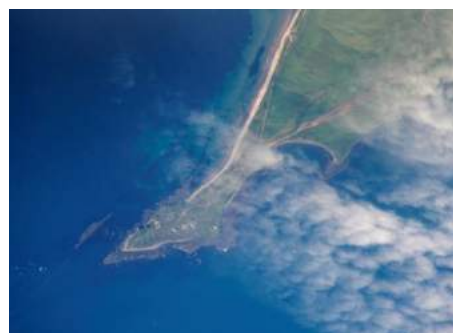
コルサコフ港



メレイにある旧日本軍の上陸記念碑



プリゴドノエの天然ガス液化プラント



クリリオン岬



利尻島



稚内市街とノシャップ岬